

国立

国会

図書館

月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2022.7/8

第57回貴重重書等指定委員会報告

新たな貴重重書のご紹介

世界図書館紀行 ロンドンの図書館



国立
国会
図書館
月報

NO. 735/736
JULY/AUGUST 2022

CONTENTS

- 1 「現代本邦築城史」第二部第一巻から
―東京湾に建設された海堡―
今月の二冊 国立国会図書館の蔵書から
- 6 第57回貴重書等指定委員会報告
新たな貴重書の紹介
- 18 NDLイメージバンク
- 20 世界図書館紀行 ロンドンの図書館

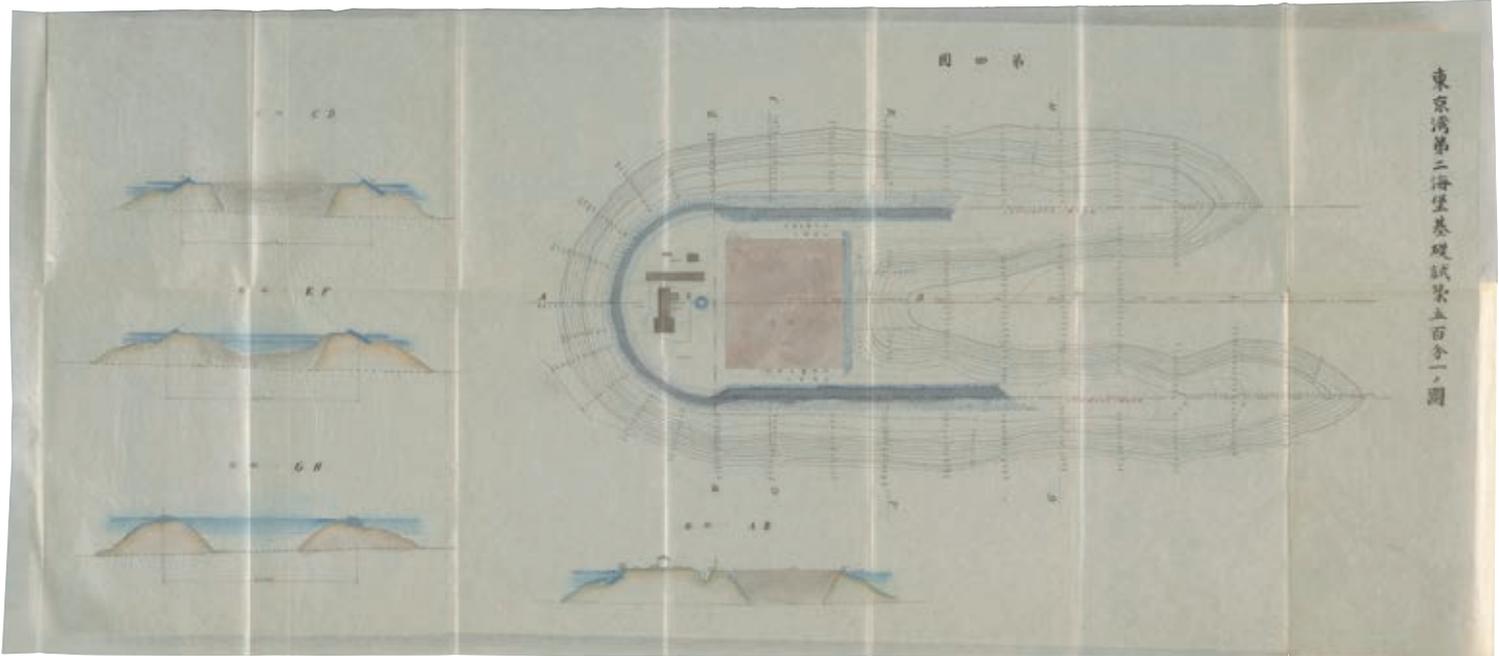
- 26 館内スコープ
地図よ、人の営みよ、永遠なれ
- 27 本屋にない本
『日本酒類販売70年史 1949-2019』
- 28 NDL TOPICS



表紙:『若冲名画集』から「蓮花香魚図」
伊藤若冲 画、田島志一 編 関西写真
製版印刷 1904 49cm
[https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/
pid/850698/](https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/850698/) (モノクロ画像)

「現代本邦築城史」第二部第一巻から —東京湾に建設された海堡

富田 穰 治



東京湾第二海堡基礎試築五百分一ノ図

現代本邦築城史 第2部第1巻

陸軍築城部本部 編 陸軍築城部本部 昭和18(1943)
<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11223558>

「現代本邦築城史」という文献からどのような内容を想像するだろうか。日本の城というと、姫路城や松本城といった戦国時代から江戸時代初期にかけて建造された近世城郭が思い浮かぶが、この本が扱っているのは、明治維新から太平洋戦争に至るまで軍事施設として構築・運用された近代要塞の歴史である。海中を埋め立てて人工の島を造り、その上に砲台を築くもので、港の防御に使われた「海堡」についても手がかりを提供してくれる。

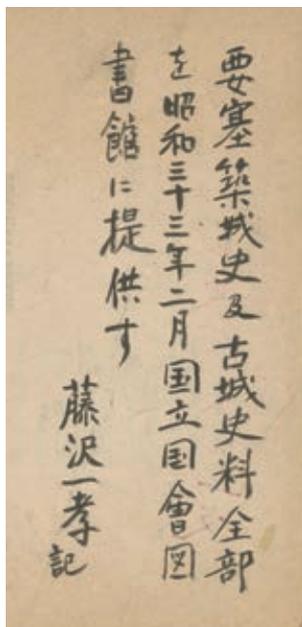
明治時代から大正時代にかけて、東京湾の防衛を目的として建設された三つの海堡に初めて興味を持ったのは、これらを取り上げた平成26(2014)年に放送されたテレビのバラエティ番組を見たときだった。この番組では、三つの海堡の一つである第二海堡における生物調査の様子が紹介され、かつての海上要塞が多様な生物の住処に変貌していることに驚かされた。

三つの海堡の存在は軍事機密であったため限られた史料しか現在に伝わっていないが、「現代本邦築城史」は特に重要なものの一つであろう。

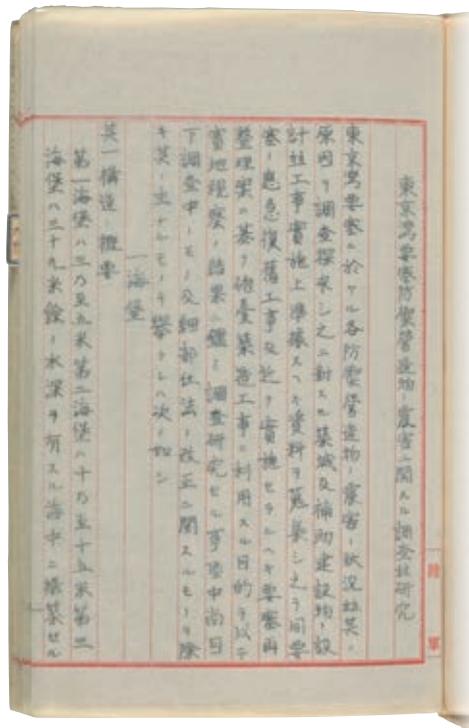
昭和8(1933)年に陸軍省に設置された本邦築城史編纂委員会は、古代から明治維新に至る城郭の歴史をまとめた「本邦築城史」の編纂を目指した。その執筆者の一人であつ

第一海堡から第三海堡の概要

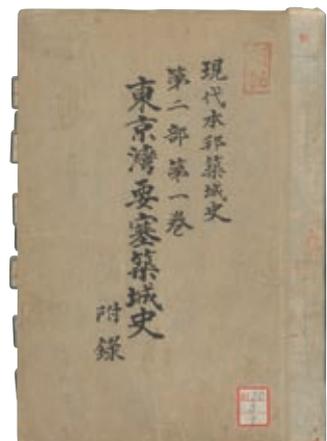
	場所	建設期間	現在
第一海堡	千葉県富津市の富津岬先端から西へ約 1.2km の地点	明治 14 (1881) 年起工 明治 23 (1890) 年竣工	砲台や兵舎などの要塞施設が現存するが、国有地であり関係者以外の立ち入りは禁止されている。
第二海堡	第一海堡の西方約 2.5km の地点	明治 22 (1889) 年起工 大正 3 (1914) 年竣工	連合軍による砲台破壊や波浪による護岸海没で、要塞施設の崩壊が進んだ。現在は、海上保安庁の灯台や一般財団法人海上災害防止センターの消防演習場が設置されている。平成 17 (2005) 年以降は一般の立ち入りが禁止されていたが、令和元 (2019) 年から旅行会社による上陸ツアーが本格的に開始された。
第三海堡	神奈川県横須賀市の観音崎と第二海堡の間をほぼ二等分する地点	明治 25 (1892) 年起工 大正 10 (1921) 年竣工	波浪により暗礁化したため、平成 12 (2000) 年から平成 19 (2007) 年にかけて撤去工事が行われ、消滅した。建造物の一部は、神奈川県横須賀市内で展示されている。



付属の小冊子「現代本邦築城史抄」巻末には国立国会図書館への提供について墨で書かれている。



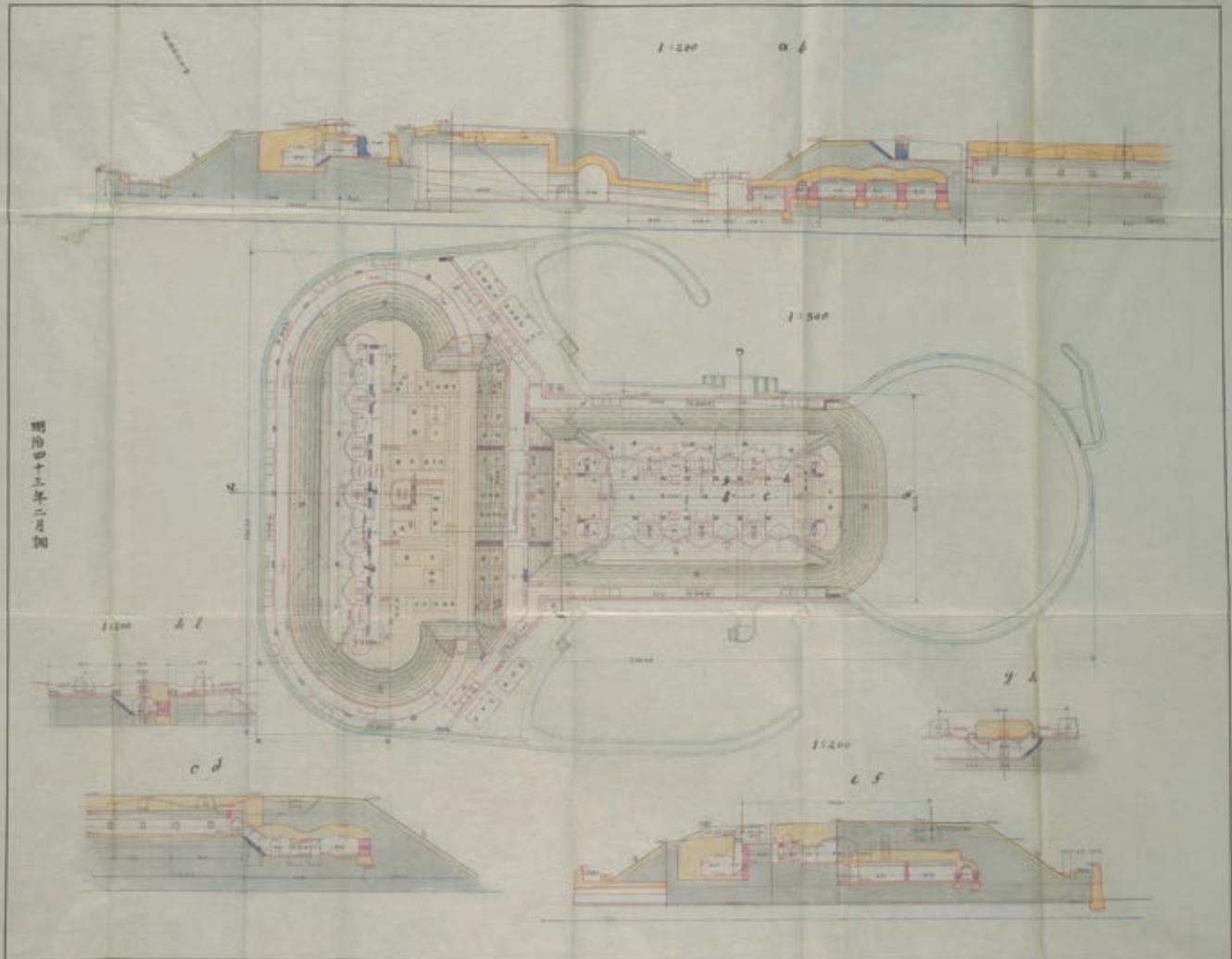
(左)「東京湾要塞防禦營造物ノ震害ニ関スル調査並研究」冒頭。
(下) 表紙



た難波恭一（陸軍築城部本部嘱託）が明治維新前後から昭和 18（1943）年の要塞整理事業終了までの築城史について別にまとめたものが「現代本邦築城史」である。なお、要塞整理事業とは、大正 11（1922）年に調印されたワシントン海軍軍縮条約第 19 条^①により、要塞の「現状維持」が定められ新たな要塞の建設が禁止されたため、要塞の整理や統廃合が進められたことをいう^②。「現代本邦築城史」は、謄写版を主とする稿本全 29 冊で、序には「明治以後ノ築城ニ関シテハ、（中略）、尚将来ノ築城業務ノ参考タラシムル為ニハ委員会ニテノ編纂ヲ待ツコトナク、出来得ル限り速カニ編纂ニ着手スルヲ適當」としたと記されている。

一方、「本邦築城史」の方は未完となった。収集された資料や原稿等の調査成果の多くが昭和 20（1945）年 5 月 25 日の東京山の手空襲で焼失したためである。幸いにも残されていた関係者の手控は、築城部本部員であった藤沢一孝により昭和 33（1958）年に国立国会図書館に譲渡され、『日本城郭史資料』全 42 冊として保存されている。同じく当館で所蔵する「現代本邦築城史」付属の小冊子「現代本邦築城史抄」の巻末には、「要塞築城史及古城史料全部を昭和三十三年二月国立国会図書館に提供す 藤沢一孝記」と墨書されて

東京湾第三海堡基礎上部仮設計図
(門田十地盛加瑞五十)



明治四十三年二月例

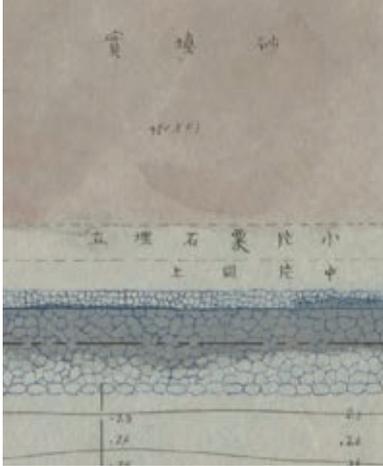
東京湾第三海堡基礎上部仮設計図

いるため、同時期に当館に譲渡されたことがわかる。その経緯について原剛(戦史研究者)は「当時、戦史室は古いものにはあまり関心がなく、(中略)明治とか古いところにはほとんど関心がなかったわけです。」と述懐している。

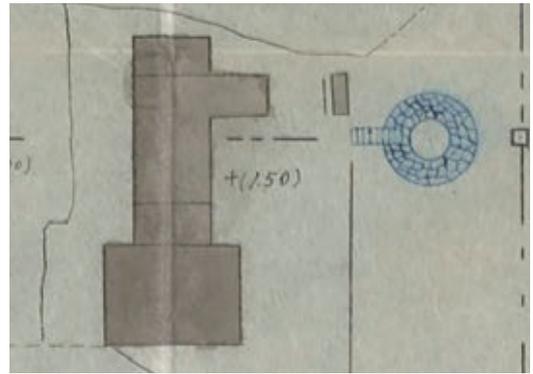
海堡の歴史を伝える文献が「現代本邦築城史」の第二巻にあたる部分であり、東京湾に建造された三つの海堡について、建造の提言書といった検討段階から各種図面等の施工段階に至るまで、数多くの資料を収録している。海堡が現状となるに至る契機といえる関東大震災の被害についても、「東京湾要塞防禦營造物ノ震害ニ関スル調査並研究」という克明な記録を収録している。

「東京湾第二海堡基礎試築五百分一ノ図」(p.1)と現在の第二海堡

※写真は筆者撮影。図と写真の並びはあくまでイメージです。



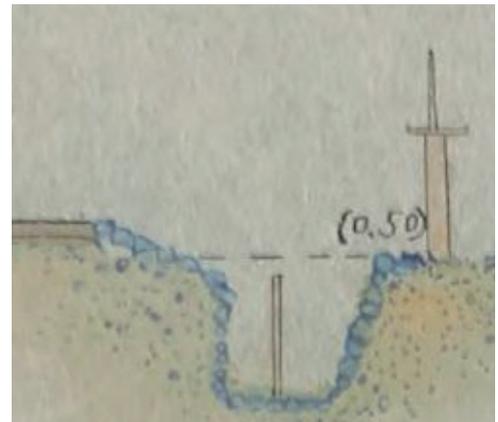
(上) 掩蔽壕 (下) 煉瓦の刻印 (桜花章煉瓦)



(左) 高角砲の砲座 (右) 中央部砲塔観測台



十五糎加農砲の砲台跡に立つ第二海堡灯台



大正12(1923)年9月1日に発生した関東大震災は、三つの海堡に甚大な被害をもたらした。最も被害が大きかった第三海堡は、大正14(1925)年に防禦營造物から除籍された。第一海堡、第二海堡は除籍こそされなかったものの、第二海堡の復旧は困難であると判断され、昭和8(1933)年までに全ての砲が撤去された。多大な経費と労力を費やして建設された第一海堡、第二海堡が事実上放棄されたのは、海堡が起工されてから四半世紀の間に、大砲の射程距離が飛躍的に伸びて、東京湾口付近の陸上からの砲撃でも十分な防御が可能となり、相対的に海堡の価値が大きく低下したためである。かくして第二海堡は、軍事要塞から釣り人の注目を集める場所へと変貌していった。

数奇な運命をたどった三つの海堡のうち、唯一、令和元(2019)年から訪問できるようになった第二海堡は、依然として知名度は決して高くないが、要塞そのものの歴史性や、多様な生物の住処としての自然環境、さらには廃墟がもつ独特の景観が相俟って重層的な魅力を放っており、一見の価値がある。第二海堡を訪問する折には、国立国会図書館デジタルコレクションで「現代本邦築城史」を閲覧するのも一興であろう。

海堡こぼれ話

大正末期から戦中まで刊行された釣り雑誌『釣之研究』の昭和13（1938）年4月号では、「第二海堡では秋ともなると中々黒鯛の良い漁が有ります」と紹介されている⁴。一方で、「第二海堡の東北に面した所へ舟を流しながら餌を放り込み、××、×尋いで底へ付いたら」などと水深が検閲により伏字になっているところに、軍事要塞としての性格も垣間見える。

第三海堡についても、昭和11（1936）年に出版された『釣魚随筆』の一篇「海堡のタナゴ」では、「櫻がうす紅につぼんで、はらへと咲いて散つて、さてしつとりと雨催ひの若葉になる頃までが、第三海堡の海タナゴの季節である」、「軍港でも大目に見てくれる故か、のんきにこの上へのつてタナゴを釣ることが出来るのは有難い」としている。



佐藤惣之助 著『釣魚随筆』竹村書房 1936<請求記号 703-124>



岩野泡鳴 著『海堡技師 冥想詩劇』
金尾文淵堂 1905 <https://dl.ndl.go.jp/infondljp/pid/877278> (モノク
口画像)

著者の岩野泡鳴は明治・大正時代の詩人、評論家、小説家、劇作家。本書は東京湾海堡の建設に従事した陸軍技師、西田明則をモデルにしたとされています⁵。

1 『官報』1923年8月17日 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2955438/15>

2 防衛庁防衛研修所戦史部 著『陸軍軍戦備』朝雲新聞社 1979 p.102 <請求記号 AZ-663-23>

3 原剛 述「私と軍事関係史料」『戦後日本研究会・近代日本史料研究会報告集 1』近代日本史料研究会 2006 p.104<請求記号 GB411-H125>

4 増井辰雄「釣場案内 海堡附近の釣」『釣之研究』14巻4号 1938.4 <請求記号 雑 35-131>

5 東京湾第三海堡建設史刊行委員会 編『東京湾第三海堡建設史』国土交通省関東地方整備局東京湾口航路事務所 2005 p.430 <請求記号 NA171-H8>

○参考文献

「記」陸軍築城部本部 編『日本城郭史資料』第42冊 [昭和年間] <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11038915/3>

中井均「本邦築城史編纂委員会と『日本城郭史資料』について 敗戦前の城郭研究史を理解するために」『中世城郭研究』7号 1993<請求記号 Z8-2808>

大類伸、鳥羽正雄 共著『日本城郭史』[増補] 重版 雄山閣 1960<請求記号 521.02-0767n-(h)>

朝倉光夫「港湾 東京湾要塞」『水路』32巻4号(通号128号) 2004.1<請求記号 Z16-811>

東京湾第三海堡建設史刊行委員会 編『東京湾第三海堡建設史』国土交通省関東地方整備局東京湾口航路事務所 2005<請求記号

NA171-H8>

「別れ惜しむ太公望 東京湾第二海堡 一般客上陸禁止に」『東京新聞』2005.6.30 1面

国土交通省関東地方整備局東京湾口航路事務所 編集・発行『富津市富津第二海堡跡調査報告書』2014<請求記号 NA171-L6>

野口孝俊、浦本康二、鈴木武「近代土木遺構「東京湾第二海堡」の建設技術 国内で初めての海上人工島の建設」『土木学会論文集D2(土木史)』70巻1号 2014 <https://doi.org/10.2208/jscejhsce.70.20>

「時事・プロジェクト 明治と現代が共存する「第二海堡」、上陸解禁へ」『日経コンストラクション』693号 2018.8.13<請求記号 Z16-1928>

「JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C02030212700、防衛省防衛研究所」<https://www.jacar.archives.go.jp/das/image/C02030212700>

国土交通省関東地方整備局 東京湾口航路事務所 「「ザ!鉄腕!DASH!!」で第二海堡が取り上げられました」<https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8842209/www.pa.ktr.mlit.go.jp/wankou/20140929tetuwandash.pdf>

国土交通省関東地方整備局港湾空港部「5月11日より第二海堡上陸ツアーを本格的に開始します!」2019.4.16.

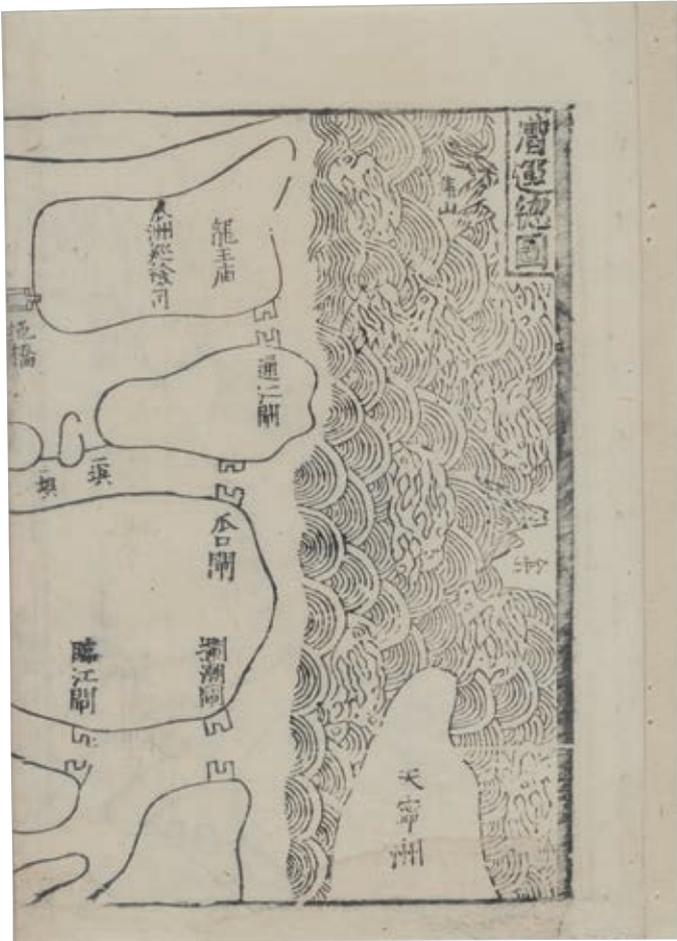
<https://www.pa.ktr.mlit.go.jp/kyoku/03info/03kisya/2019/190416-sdai2kaihou0511kaishi.pdf>

※ URL の最終アクセス日: 令和4年5月18日

※引用の旧字は新字に、旧仮名づかいはママとしました。

第57回貴重書等指定委員会報告

新たな貴重書の紹介



漕運総図

国立国会図書館は、蔵書のうち、資料的価値が高いものなどを「貴重書」「準貴重書」に指定しています⁽¹⁾。令和4年2月16日、和漢書6点、洋書1点を貴重書に、和書1点を準貴重書に指定し、累計で貴重書は1323点、準貴重書は802点となりました。

(貴重書等指定委員会)

『漕運通志』は、漢代から明代に至る漕運、すなわち河川や運河を使って租税収入の穀物などを地方から都へ輸送する国家事業に関する歴史を記した書物で、ほかにみられない貴重な史料が多数収録されています。伝本は本書以外に、当館が所蔵する明の嘉靖9

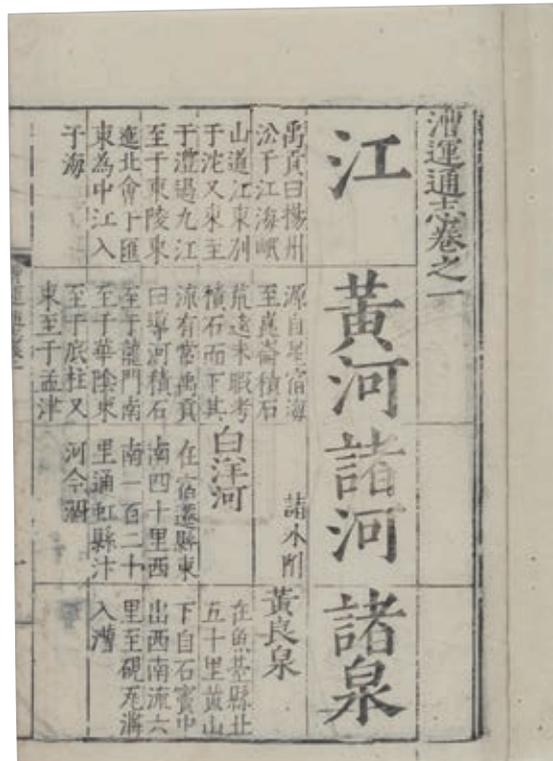
だし、料紙に、WA35・100本は竹紙、本書は白棉紙はくめんしが使われています。白くて丈夫な高級紙である白棉紙が使用された本書は、特製本といえるでしょう。役所に献上するなどの目的で製作されたものと思われる。

(1530)年序刊本(当館請求記号 WA35・100⁽²⁾)と、中国国家図書館が所蔵する嘉靖39年頃の補訂本が知られています。

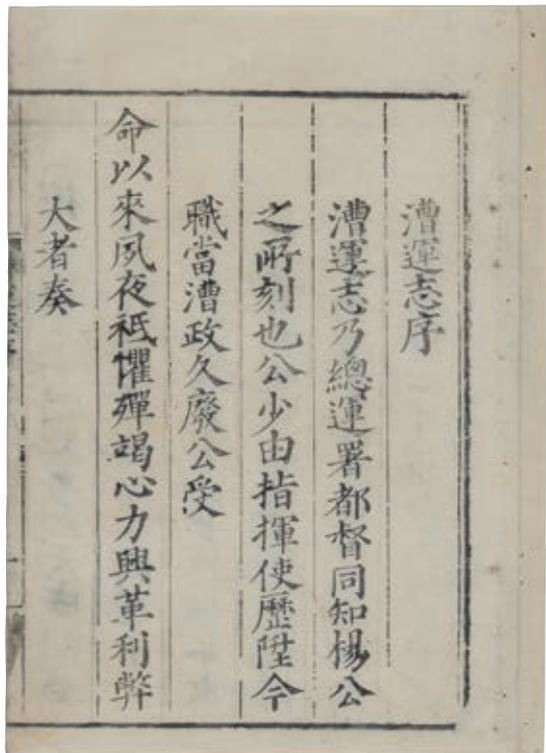
漢籍を尊重した江戸時代以前の日本には多数の書物が輸入され、大切に保管されました。このため現代の中国でも稀な本が多く伝存しています。当館が2本所蔵する『漕運通志』も、そうした歴史を窺わせる貴重な資料といえます。

本書(当館請求記号 WA35・101)は、WA35・100本と、ほぼ同じ時期に同じ版木を用いて印刷された本と考えられます。た

う。



卷1 卷頭



嘉靖7年廖紀序 第1丁表



【参考】WA35-100本 卷1 卷頭
竹紙が使用されている。

- 1 「国立国会図書館貴重書指定基準」「国立国会図書館準貴重書等指定基準」の規定に基づき、館内の貴重書等指定委員会が行っている。
- 2 同書については、本誌687/688 (2018年7/8月号) 参照。なお、本書の一部がWA35-100本に補配されており、また、WA35-100本で欠丁とされていた部分が本書の補配に使用されていることが判明したため、本書の貴重書指定に当たり、それぞれの補配箇所を本来の資料の位置に戻しました。その結果、WA35-100本の書誌は下記のように訂正されました (訂正箇所は下線で表示)。国立国会図書館デジタルコレクションの画像も修正を予定しています。

漕運通志 10巻 <請求記号 WA35-100>

嘉靖9 (1530) 序 (明) 楊宏、謝純撰

3冊 大きさ28×18cm 欠丁: 嘉靖7年廖紀序第1-3丁、卷7第6丁裏、卷8第1丁、卷10第75-77丁

印記: 謝在杭家藏書、晉安謝氏家藏圖書、明治九年文部省交付、東京書籍館明治五年文部省創立 TOKIO LIBRARY. FOUNDED BY MOMBUSHO 1872、帝國圖書館藏

漕運通志 卷1-8

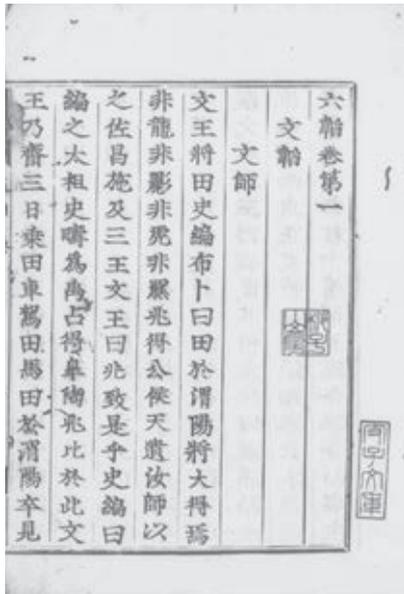
<請求記号 WA35-101>

嘉靖9 (1530) 序 (明) 楊宏、謝純撰

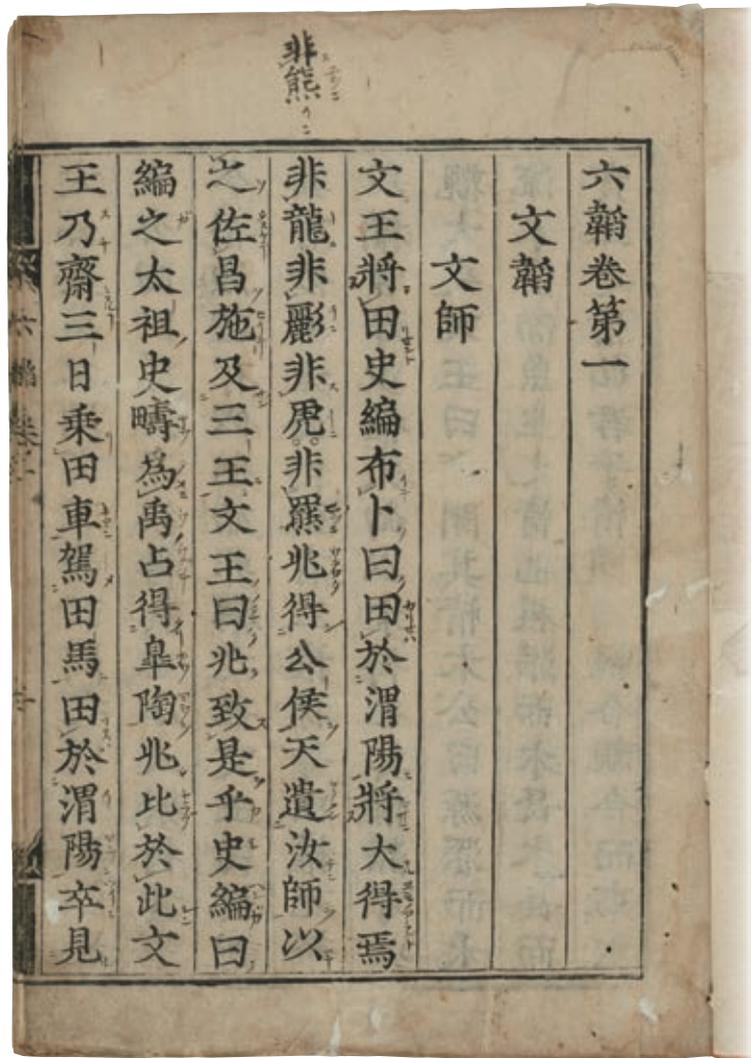
3冊 大きさ25×18cm

序題: 漕運志 嘉靖4年謝純序、嘉靖7年廖紀序、嘉靖9年唐龍序
あり 左右双辺 有界 每半葉8行22字 注文小字双行 上黒魚尾 白口 欠巻: 卷9・10 欠丁: 嘉靖9年唐龍序第1-3丁、卷2第22・36・37丁、卷4第12丁、卷8第21丁





【参考】慶長5年伏見版『六韜』巻頭
九州大学中央図書館支子文庫所蔵



巻頭

『六韜』は中国古代の兵法書で、戦国時代末期（紀元前3世紀頃）の成立と推定されます。文韜・武韜・竜韜・虎韜・豹韜・犬韜の6巻から成り、周の文王・武王の間に太公望呂尚が答える形式で経世済民や富国強兵の策が説かれます。日本にも古くより伝わり、戦国時代から江戸初期にかけては多くの武將に読まれました。特に徳川家康が『六韜』を愛読し重んじたことが知られており、慶長4（1599）年から11年にかけて家康の命により伏見版（古活字版）として繰返し刊行されました。

六韜 6巻

<請求記号 WA7-298>

慶長18（1613）

1冊 大きさ27.2×19.0cm

慶長5年伏見版（古活字版）の覆刻整版 刊記「維時慶長十八年癸丑初秋吉辰」 四周双辺 有界 每半葉8行 毎行17字 上下花魚尾 黒口 朱色雷文繫地に菊花散らし型押表紙（後補） 前後の表紙の見返し裏打ち紙に「清井」「清井改」の印あり





卷末・刊記

整版と古活字版



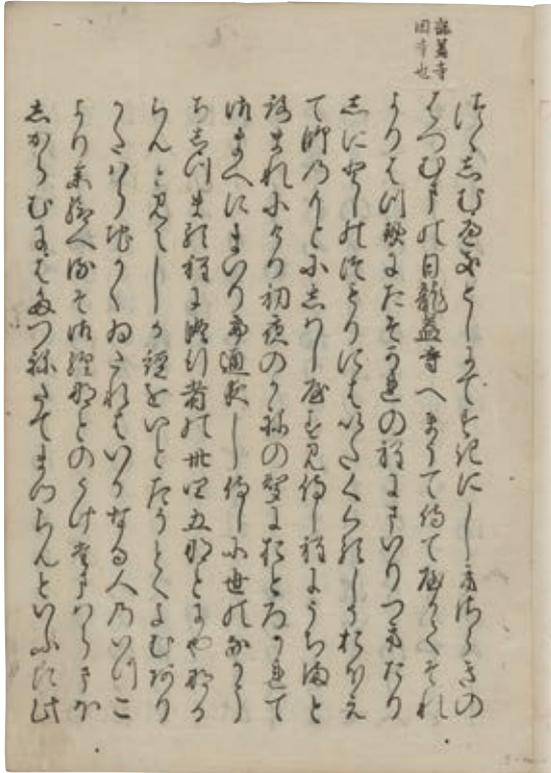
整版の版木

整版とは一枚の板に文字や絵を彫った版木を用いて印刷されたもので、古活字版は活字を使って印刷されたものです。

奈良時代以来、日本の出版物のほとんどは整版で出版されましたが、文禄年間（1592～96）から慶安年間（1648～52）に至るおよそ50年の間には古活字版が盛んに出版されました。しかし、書物の需要が増大し、商業出版が盛んになると、増刷の際に活字を組みなおす必要がある古活字版に代わって、整版が再び主流となりました。

本書は慶長5年伏見版を覆刻した整版で、慶長18年に刊行されました。『六韜』の整版としては最古とみられますが、出版者は不明です。江戸時代初期には本書のように古活字版を版下に用いた整版が多数出版されましたが、慶長18年版『六韜』はその中でも早期のものと言えます。なお、これをさらに覆刻した整版も伝存し、古活字版から覆刻を重ねながら整版が流通していく様子をうかがうことができます。

- 3 徳川家康の命により、慶長4年から11年にかけて三要素元信（足利学校第9代座主（しょうしゅ））が京都伏見円光寺において刊行した古活字版をいう。
- 4 慶長4年版、慶長5年版、慶長9年版（2種あり）の『六韜』が伝存する。また、他の兵法書6種とあわせた『七書』慶長11年版（2種あり）の一部としても刊行されている。
- 5 慶長18年の刊記もそのまま覆刻されている。東洋文庫、龍谷大学所蔵。なお、無訓整版『七書』のうちの「六韜」は、刊記の1行を削除するものの、この再覆刻版と同版である。



『水鏡』巻上本文冒頭。『ますかゝみ』と版式が共通している。



(上)『水鏡』巻上表紙。書名を記した題簽(だいせん)は後補。
(下)『水鏡』巻上目録。

ここでは『水鏡』と『増鏡』の古活字版を紹介します。

『水鏡』は平安末期から鎌倉初期に成立したと推定される歴史物語、また、『増鏡』は南北朝時代の成立と推定される歴史物語で、いずれも古老等が語った内容を筆録したという聞き書きの形式をとります。このような形式で記された最初の物語が、平安時代後期に成立した『大鏡』であり、文徳天皇から後一条天皇の治世を扱います。これを追って、神武天皇より仁明天皇までを対象とした『水鏡』、後鳥羽天皇の誕生から後醍醐天皇の京都帰還までを描く『増鏡』等の作品が著され、『鏡物語』と呼ばれる作品群を形成しました。中でも『大鏡』・『水鏡』・『増鏡』は、江戸時代には「三鏡」と総称されていました。

古活字版『大鏡』・『水鏡』・『増鏡』には、同種の活字、同種の表紙を使用したものが伝存しており、『三鏡』の揃いとして出版されたと推定されています。これらには、刊記はありませんが、字体の特徴等から慶長・元和年間(1596)

水鏡 3巻

<請求記号 WA7-299>

[中山忠親] [著] [慶長・元和年間]

3冊 大きさ28.4×21.0cm

古活字版 無辺無界 字高23.0cm 每半葉12行 毎行20字内外 漢字平仮名交じり 細字双行 黒色雷紋繫ぎ牡丹唐草模様型押表紙 後補書き題簽 巻上見返しに紙片貼り込み「好古日録曰。御厨子所預ノ家所蔵ノ水鏡ハ活字本ナリ。其文印版ノ水鏡ト大異同アリ。水鏡ノ原本ナラン。印版ハ後人猥ニ日本紀ニ拠テ。取捨シタル所アリト見ユ」表紙の芯紙に『拾遺和歌集』(版本)の反故を使用 印記：冷泉府書、寶玲文庫、藤□□、月明莊



ますかゝみ

<請求記号 WA7-300>

[慶長・元和年間]

6冊 大きさ28.5×20.7cm

古活字版 書名は刷り題簽による 無辺無界 字高23.1cm 每半葉12行 毎行20字内外 漢字平仮名交じり 細字双行 黒色雷文禪雨龍型押表紙 第1冊(第二新嶋もり)末尾に「以後崇光宸筆校考(朱書)以為明卿所書校了(墨書)」と識語あり 第6冊巻末に「以後崇光院宸翰之本遂校合畢」と識語あり 印記：野宮書印、青谿書屋、寶玲文庫、巖松堂古典部波多埜扱斯書、月明莊





(右)『ますかゝみ』第1冊表紙。原装原題箋。
(左)『ますかゝみ』「第二新嶋もり」末尾。「以後崇光宸筆校考/以為明卿所書校了」という書入れがある。

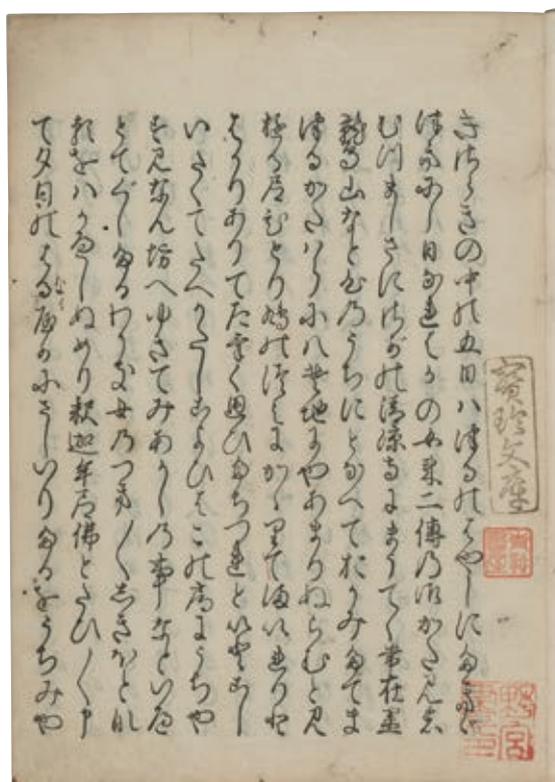
フランク・ホーレーと『水鏡』『増鏡』

巻頭に押された蔵書印から、『水鏡』は冷泉家（藤原北家御子左家庶流、歌道を業とする、印記「冷泉府書」）の、『増鏡』は野宮家（藤原北家花山院家庶流、印記「野宮書印」）の旧蔵であることが見て取れます。近代に入って両書ともフランク・ホーレー（Frank Hawley 1906～1961、印記「寶玲文庫」）の所蔵になりました。ホーレーはイギリス出身の言語学者で、1931年に東京外国語学校等の語学教師として来日しました。日本語に堪能で書誌学にも通じ、多くの貴重な古書を収集したことで知られます。別々の機会に入手したためか、印記の色が異なるのも興味深い点です。

『増鏡』の本文について

古活字版の増鏡は、『増鏡』の刊本としては最初のもので、江戸時代に流布した整版本の本文はこれに依拠しているとされます。流布テキストのもととなったものとして重要な位置を占めるものといえます。また本書は、伝二条為明*筆の古写本による校合が行われたことを推測させる書入れを持ちます。現在、この古写本の伝存は知られておらず、本書の書入れは『増鏡』の本文研究の手がかりとなりうるものといえます。

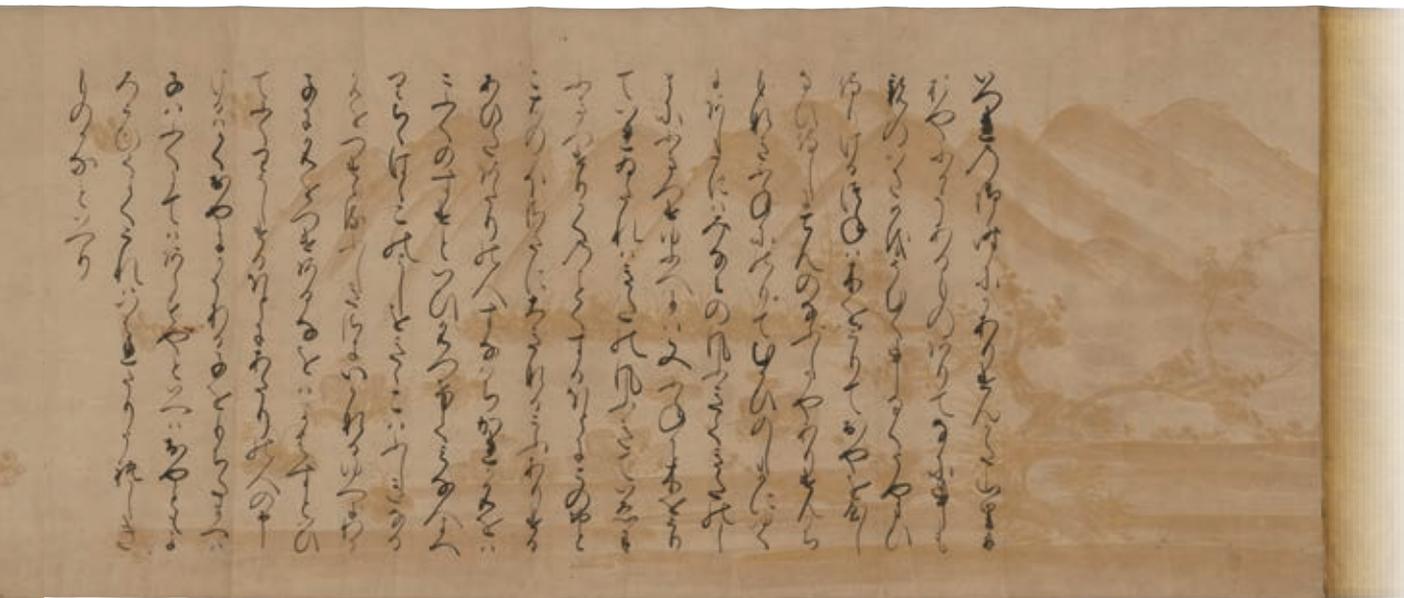
※ 1295～1364。鎌倉～南北朝時代の公卿、歌人。二条為藤の子。歌は「続千載和歌集」等に入集。



『ますかゝみ』第1冊巻頭。
この「寶玲文庫」印は黒印で捺されている。

1624)に刊行されたものと考
えられています。
今回、貴重書に指定された『水
鏡』・『増鏡』と、すでに所蔵して
いた貴重書の『大鏡』とをあわせ
て、当館に慶長・元和年間刊行の
古活字版「三鏡」が揃うことにな
りました。

6 近代にはこの3作品に『今鏡』を加えた「四鏡」とするのが一般的になる。
7 川瀬一馬『古活字版之研究』増補版（日本古書籍商協会、1967）
8 当館請求記号 WA7-205



(上) 小ふく之助は右の頬に瘤をもつ木こりの若者。老親を養うため、毎日島々を巡って木こりに精を出す。
 (左) 小ふく之助は山中で鬼の宴に遭遇する。鬼は歌って踊るだけではなく、「相撲」や「兵法比べ」を披露する。



本書は、『宇治拾遺物語』第3話「鬼に瘤取らるること」の改作である「小ふく之助物語」を題材にした奈良絵本¹⁰⁾です。『宇治拾遺物語』は、近世に広く親しまれた説話集であり、多くの奈良絵本に取り入れられています。第3話「鬼に瘤取らるること」を素材にした奈良絵本は本書以外に知られていません。

装丁は、20紙継の卷子装で、金泥下絵を施した詞書と、金銀泥を用いた極彩色の挿絵が交互に継ぎ合わされています。末尾には、本書の制作者のものとして推定される3種類の印が押されています。これらの印は、江戸時代前期に京都に所在し、大名等を顧客に豪華奈良絵本を制作していたとされる絵草

小ふく之助物語

<請求記号 WA 31-23>

[江戸前期] [写]

1軸 紙高32.5cm

奈良絵本（彩色絵入写本） 書名は箱書による 卷子装（20紙継10図） 漢字平仮名交じり 紙本金泥彩色 若葉色宝相華文様裂表紙 見返しは金箔 箱側面に「持細色絵入こぶく之【介】」と墨書あり 印記：小泉、七左衛門尉安信、[ほか壺形印あり]

9 昔話として知られる「瘤取り爺」説話の一種。

10 室町時代後期から江戸時代中期までに制作された彩色絵入絵本の総称。



紙屋「小泉」の印と考えられています。奈良絵本は多くの伝本が存在しますが、制作者の署名・印等を伴うものは稀少です。本書は、奈良絵本制作の実態を知る手がかりとなる貴重な資料といえます。



鬼の宴のあまりの面白さに、小ふく之助は恐ろしさも忘れて、鬼の前で踊りだす。



左上：「小泉」、左下：「七左衛門尉安信」、右：壺型印
いずれも絵草紙屋小泉の印と推定されている。



鬼から貰った宝を貴人に献上することにより、小ふく之助は領地を与えられる。家は富栄え、子孫は大いに繁栄した。



農耕図の1枚。このほかに5図の農耕図が収録されている。



どちらが初版が分かりますか？
違いを見比べてみてください。

正解：右が初版の延宝版、左が再版の天和版

『大和侍農繪づくし』は菱川師宣(1618～1694)による風俗絵本です。各丁の下端には士農工商の各身分の人物が生業に励む様子がいきいきと描かれ、上段にはその絵にちなんだ詞書が書かれています。収録されている農耕図は、版本に掲載されたものとして、現在確認されているなかで最古と言われています。

本書は延宝8(1680)年鱗形屋から出版された初版本です。その後、天和4(1684)年、貞享3(1686)年と版を重ねます。再版本は初版本の被せ彫りで製作され、絵も細部にわたって忠実に再現されていますが、徐々に人物の口元や目元にわずかな差異が生じてゆき、初版では情感豊かに描かれていた表情の魅力が失われたり、絵の一部を写し損ねたりしています。したがって、版が古いほど、師宣の画風を忠実に伝えるものと言えます。

大和侍農繪づくし

<請求記号 WA 32-25>

菱川吉兵衛尉〔画〕 鱗形屋三左衛門 延宝8(1680)

1冊 大きさ28.0×18.6cm

書名は序による 書き題簽書名：大和繪づくし 刊記「大和繪師 菱川吉兵衛尉/延宝八庚申歳五月上旬/板本所/大傳馬三町目 鱗形屋三左衛門」21丁 四周単辺 無界 紺色表紙 蘭計序

- 11 被せ彫りとは、版本を再版する際に前の版本の丁を貼りつけて写して版木を彫り、作ること。
- 12 なお、この3点のうち、たばこと塩の博物館の所蔵本には刊記がない。
- 13 当館請求記号 寄別5-6-4-6
- 14 当館請求記号 W331-N25

貴重書

初版本は、当館を含め国内で3点しか確認されていません。また当館は天和版、貞享版も所蔵しており、その違いを見比べることができます。今後の研究の一助となる本でしょう。

『潮来絶句集』には乾坤を合冊し、末尾に曲亭馬琴（1768～1848）の「潮来曲後集（いたこうたこうしゅう）」と題する短文及びその跋文を付した1冊本もあります。また、『絵本潮来廻囃子（えほんいたこのそうし）』と改題された一部再刻本もあります。



書袋および乾（けん：上巻）・坤（こん：下巻）表紙。表紙の「霞に梅」の様子は金銀彩の手描き。



乾巻第6図。女性ふたりの帯の柄や、桜の輪郭の薄黄色など、色摺りの状態がよく保存されている。

潮来絶句集

<請求記号 WB36-9>

富士唐麿 著 画狂人北齋 画 耕書堂 [享和2 (1802)]
2冊 大きさ19.5×13.5cm

書名は題簽による 序題：潮来絶句 書袋の書名：潮来集
色刷 原表紙 原題簽 書袋（表側のみ残存 色刷「潮来集」「富士唐麿/柳亭陳人/著」「画狂人/北齋画」「江戸書房/耕書堂梓」とあり）1枚を付す 梭江漫士（西原一甫）序 まつかげのあるし（鳥海松亭）跋 蘭洲逸士兆熊（伊東蘭洲）跋

- 15 もとは常陸国の舟歌で、のちに座敷唄となり、江戸などに広まった。
- 16 本を収納して売るための、筒状の袋。
- 17 伊賀藤堂家に江戸定府の藩士として仕え、のちに文人として各地を遊歴した。藤堂梅花とも。
- 18 北齋の雅号に由来。
- 19 書袋を残す伝本は、本書の他には大阪大学忍頂寺文庫の1本のみ。



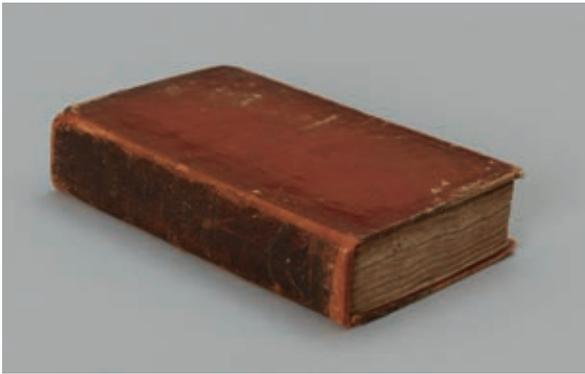
本書は潮来節の歌詞に漢詩への翻案を並べ、色摺りの挿絵をつけた絵本です。

刊記はなく、作者名や版元名は書袋に記されています。作者の本名は藤堂良道（1770～1844）、絵師は葛飾北斎（1760～1849）、版元は耕書堂蔦屋重三郎（2代）です。

北斎は、寛政（1789～1801）の末から享和（1801～1804）にかけて、豪華な絵本や摺物の類を多く作成しており、『潮来絶句集』は、この時期の作品のひとつです。当時、北斎

が描いた細身の女性は、「宗理風」と呼ばれ評価されましたが、『潮来絶句集』には、ほぼ全図にわたって、この宗理風美人が描かれています。またこの作品は刊行の数年後、彩色本禁止の町触により出版禁止となったことでも知られています。

本書は、原表紙・原題簽及び、稀少な書袋を残すなど、現存する同本の中でも保存状態が非常に良いものです。退色や手摺れもほとんどなく、繊細な彫りや摺りなど、刊行当時に近いと思われる状態を見て取ることができるといえます。



(左上) 製本は革装で、背は後世の補修のようです。

(左) タイトルページに錨とイルカの商標があります。タイトルページに面した左側の遊び紙にはイギリスの弁護士であるヴァーノン・ラッシュントン (Lushington, Vernon, 1832~1912) から、ラファエル前派の画家ダンテ・ゲイブリエル・ロッセティ (Rossetti, Dante Gabriel, 1828~82) の弟であり美術評論家のウィリアム・マイケル・ロッセティ (Rossetti, William Michael, 1829~1919) への献辞があります。本書はのどの開きが悪いため、閲覧の際は角度 (90度弱) をつけた書見台を用います。

『神曲』はイタリア最大の詩人といわれるダンテの代表作で、今日でも世界文学の古典として知られています。内容はダンテが、大詩人ウエルギリウス、ベアトリッチェ、聖ベルナルドらに導かれて地獄、煉獄、天国を旅するという長編叙事詩です。ダンテは1302年にフィレンツェを追放されて以降、故郷に戻ることなく、1321年にラベンナで亡くなりましたが、『神曲』はその流浪の生活の中で、1307年頃から執筆され、最晩年の1321年頃に完成したと言われています。

本書は、ヴェネツィアのアルド・マヌーツィオ (1450頃~1515) が設立したアルド印刷所から、初代アルドが亡くなった後に事業を引き継いだ義父のアンドレア・トルレザーニ (1451~1529) によって出版されました。初代アルドが出版史上に残した功績である小型の八折判、イタリアック体活字という特徴を備えた、アルド印刷所刊行の『神曲』第二版に該当します。巻末に、初版にはなかった、地獄を表現した木版図が挿入されています。

ダンテ『神曲』(1515)

<請求記号 WA42-101>

貴重書

Dante Alighieri, 1265-1321. Dante col sito, et forma dell'inferno tratta dalla istessa descrizione del poeta. [2nd edition] Vinegia : nelle Case d'Aldo et d'Andrea di Asola, M.D.XV. [1515] 2 unnumbered preliminary leaves, 244 leaves, 4 unnumbered leaves; 16.3 × 10.0 cm (8vo)

Imprint from colophon (H4r). Anchor and dolphin device on title page, recto of leaf preceding text (a1r), and verso of final leaf. Signatures: π^2 , a-i⁸, K⁸, l-z⁸, A-H⁸. (π 2v, l2, x3v, H8r blank). Library's copy imperfect: leaf H7 is lacking. Gift inscription on the verso of the front free endpaper "William Rossetti from his friend Vernon Lushington. 18 June 1873."

20 初版は1502年刊。



巻末には初版にはなかった木版図が収録されています。上は9層からなる地獄の断面図のページで、画面の最上部中央には「エルサレム」と書かれています。地獄がエルサレムの地下にあると考えられていたためです。漏斗状に下に行くほど狭まりながら層をなしている地獄の様子がダンテの詩句に従って描かれ、最下部には「地球の中心」と書かれています。

当館所蔵アルド版タイトルリスト

アルド版とはアルド・マヌーツィオとその後継者達によって、1495年から約100年にわたり、アルド印刷所から出版された一連の資料です。当館ではダンテ『神曲』(1515)の他に初代アルド・マヌーツィオ、義父アンドレア・トッレザーニ、初代アルドの末子パオロ・マヌーツィオ(1512~74)によって出版された合計12点のアルド版を所蔵しています。 ※No.7とNo.8は合本されています。

初代アルド・マヌーツィオ刊行		当館請求記号
1	Iamblichos, <i>De mysteriis Aegyptiorum, Chaldaeorum, Assyriorum</i> , 1497. イアンブリコス『エジプト人、カルデア人、アッシリア人の秘儀』	WA42-41
2	Martialis, Marcus Valerius, <i>Martialis</i> , 1501. マルティアリス『短詩集』	WA42-42
アンドレア・トッレザーニ刊行		当館請求記号
3	Pontano, Giovanni Gioviano, <i>Centvm Ptolemaei sententiae ad Syrvm fratrem à Pontano è graeco in latinvm trala tae, atqve expositae...</i> , 1519. ポンターノ『全集第3巻』	WA42-30
パオロ・マヌーツィオ刊行		当館請求記号
4	Isocrates, <i>Isocrates nvper accvrate recognitvs, et avctvs</i> , 1534. イソクラテス『雄弁家論集』	WA42-7
5	Calepino, Ambrogio, <i>Ambrosii Calepini Dictionarivm ...</i> , 1548. カレピヌス『改訂ラテン語辞典』	WA44-15
6	Manuzio, Paolo, <i>In Epistolas Ciceronis ad Atticvm, Pavli Manvtii commentarivs</i> , 1553. パオロ・マヌーツィオ『アッティクス宛キケロ書簡集の注釈』	WA42-100
7	Archimedes, <i>Archimedis Opera non nulla ...</i> , 1558. アルキメデス『著作集』	WA42-83
8	Delfino, Federico, <i>Mathematici praestantissimi : De fluxu et refluxu aquae maris subtilis et erudita disputatio</i> , 1559. デルフィーニ『海水の流れと逆流について、洗練された博学なる議論』	WA42-83
9	Horatius Flaccus, Quintus, <i>Q. Horatius Flaccvs, ex fide atqve avctoritate decem librorum manuscriptorum...</i> , 1566. ホラティウス『著作集』	WA42-43
10	Livy, T. <i>Livii Patavini Historiarum ab vrbe condita, libri, qvi extant, XXXV : cvm vniversae historiae epitomis...</i> , 1566. リヴィウス『ローマ建国史』	WA42-44
11	Hieronymus, <i>Epistolae D. Hieronymi, Stridonensis, et libri contra haereticos</i> , 1566. ヒエロニムス『書簡集』	WA42-46
12	<i>Catechismvs ex decreto Concilii Tridentini</i> , 1566. 『トリエント公会議教理問答集』	WA42-45

【参考文献】 雪嶋 宏一「アルド・マヌーツィオと彼の後継者たち」『国立国会図書館月報』675/676号 2017.7 pp.10-18<請求記号 Z21-146>
『ダンテ『神曲』の旅 描かれた地獄・煉獄・天国』(町田市立国際版画美術館, 2004) <請求記号 KR274-H3>

2,000点以上の
著作権フリーの
画像を収録

学べる、使える、新しい電子展示会

NDLイメージバンク

「NDL イメージバンク」は国立国会図書館所蔵の浮世絵、雑誌、図書などから、選りすぐりのビジュアル資料を紹介するオンライン展示です。

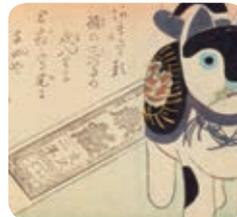
歌川広重や川瀬巴水の描いた美しい日本の風景画や、大正ロマンを象徴する画家竹久夢二の描く可憐な美人画の人気作のほか、雛祭り、お花見、花火など四季の風物を描いた江戸の浮世絵等も多数収録しています。

ぜひアクセスしてご覧ください。

<https://rnavi.ndl.go.jp/imagebank/>



著作権保護期間を満了した画像を利用しているため、年賀状、オリジナルグッズづくりなど、様々な用途に掲載イメージを活用いただけます。





世界図書館紀行

ロンドンの図書館

田幡 琢磨

はじめに

私は長期在外研究の制度を利用してイギリスのロンドンにあるロンドン大学ユニバーシティカレッジ (University College London (UCL)) で科学技術社会論 (Science Technology and Society (STS)) という学問を学んでいます。STS は広く社会と科学・技術の関係を考える学問分野です。図書館は新しい知識を求めて多くの人がやってくる場所であり、知識と社会の接点の一つと言えます。科学的な知識が知識全体において大きな割合を占めるため、STS で扱う内容は国立国会図書館が一般利用者向けに提供する情報から国会議員向けのレファレンス、はては社会における図書館の役割について考える上で役に立つものになります。この紀行ではロンドン留学中に利用した図書館とこの街での生活を少しだけ紹介いたします。





(上) UCLの中央図書館の外観。入学時には歓迎の横断幕が飾られていました。
 (左) 中央部で各部門や閲覧室につながっています。UCLの中央図書館は素敵な内装をしているため、他の教室とともに映画の撮影に使われることもあります。

(右) 図書館の内部（書架）。棚の向こう側には閲覧室やレファレンスライブラリアンの部屋があります。

(下) 講義に使われる教室。映画の撮影などに使われたことがあります。



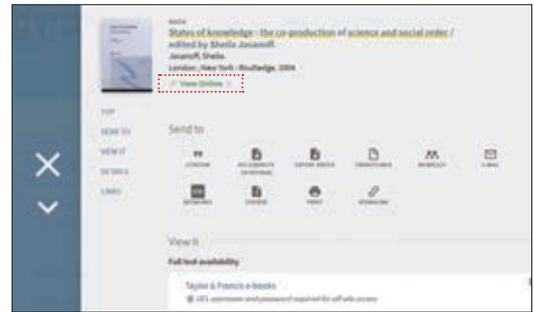
University College London

大学の中心は図書館

UCLの正門を通り抜けるとまです目に飛び込んでくるこの建物、なんと図書館です。大学の中心は図書館、そんな大学の考え方が伝わってくるかもしれない入学初日でした。UCLには18の図書館があり、この中央図書館は学期中の平日は24時間開館しています。中央図書館は哲学や歴史学、経済学などいわゆる文系の諸学問を中心に30の分野の資料を所蔵しています。

600以上の閲覧席のそれぞれにはセンサーが設置されており、Webページ上から現在の混雑具合を把握することができます。グループ学習するための部屋が必要ときや静かな環境で集中して作業したい時などにはWeb上で予約できるようなっており、図書館に行ってみたものの座れる場所がないという事態は発生しません。授業ではグループワークを課されることが多く、利用するスペースを確実に予約することのできる本システムにはお世話になりました。予約競争に負け、屋外で議論するグループをちらほら見かけるのは学期末の風物詩かもしれません。

イギリスの大学の修士課程では



(上) UCLの図書館の資料検索画面。「View Online」とあるのが「オンラインで利用できます」ボタンです。

UCLExplore(<https://ucl.primo.exlibrisgroup.com/>)より。

(左) 中央図書館はクリスマスになるとライトアップされます。



Senate House Library

長い伝統を持つ Senate House の建物と閲覧室にはそこにいるだけで背筋の伸びるような風格が漂います。



大量のリーディングアサインメント (reading assignment) を課されます。授業に参加するためにはリーディングアサインメントとして指定された論文や書籍を事前課題として読み、内容をまとめて疑問点や質問事項を整理し、授業でのディスカッションに備えるなかなか大変な作業が必要です。この作業に欠かせないのが図書館……なのですが、驚くことにほとんどのリーディングアサインメントは電子図書館上で入手できます。

既に紹介した中央図書館などUCLには大きな図書館がいくつもありますが、資料を検索し閲覧する場は中心は完全にオンラインに移行していると言えます。図書館の検索システムは多少あいまいな検索語も許容しており、任意のキーワードから関連文献を検索できるようになっています。図書の内容紹介や論文の抄録 (abstract) はこの段階で確認できますし、当該図書への書評記事へのリンクもあります。なによりも、「オンラインで利用できます」ボタンがあり、電子リソースへの誘導がとてよくできています。事前に大学のアカウントにログインしておけばすぐに論文本文にたどり着けます。

キャンパスの外にも足を延ばしてみましょう。まずは Senate House Library。ロンドン大学系列の機関が共同で管理している図書館です。1871年にロンドン大学図書館として始まったこの図書館は、1937年には大規模化の進むロンドン大学群を管理するために新たな本部として建設された Senate House に移ります。その長い歴史から現在では200万冊を超える図書、50万冊のアーカイブコレクション、1,600ものアーカイブコレクションを有するロンドン有数の図書館になりました。UCLなどの個々の大学が独立した今でも系列大学の学生が利用できる図書館としてその名残が残っています。

リーディングアサインメントとして刊行から時間が経過し電子化もされていない資料が課されたときには、UCLの図書館に所蔵がないことがあり、こちらを訪れます。人文・社会科学系の1900年代後半に出版されたような比較的古い図書の所蔵が多く、金曜日を除く平日は午前9時ごろから20時45分まで開館していますので急ぎのときにも資料入手が間に合います。



(右上) British Library 入口。
 (右) 資料を利用した展示。この時は社会の様子をインフォグラフィックス化した展示でした。
 (上) 内部の公共スペース。下に見えるのはカフェで、その横のガラス越しには書架が見えます。中にあるのはジョージ 3 世によって収集された King's Library というスペシャルコレクションです。

British Library からすぐ近くの King's Cross 駅内部。利用客でいつも賑わっています。



にぎやかな英国図書館、静かな英国図書館

つづいて、英国図書館。British Libraryとして知られるイギリスの納本図書館です。世界で最大規模の図書館の一つであり、国立図書館の大事な役割である全国書誌の作成もここで行われています。

英国図書館はロンドンの中心駅の一つである King's Cross 駅のすぐ近くに位置し観光名所としての役割もあります。一般公開エリアでは音楽イベントや展示会が開催されたりします。この一般公開エリアまでは利用者登録なしで、誰でも入ることができ、お土産を購入したりカフェで飲み物や軽食を楽しむこともできる空間です。

その一方、ひとたび調査研究用途で利用する閲覧室 (Reading Room) に入ると雰囲気が大きく変わります。私が主に利用しているのは新聞資料室 (Newsroom) と科学閲覧室 (Science Reading Rooms) です。いずれの閲覧室も静謐で利用者が自分の調査に打ち込んでいる空間でした。閲覧室に入るためには事前の利用者登録が必要で、登録時には自分が主に調査する分野を述べる必要があります。各専門の部屋にはそ

の分野を専門とする図書館員が配置されレファレンスに対応してくれます。このようなレファレンスはオンライン上でも依頼できます。

電子資料については、納本された資料に電子書籍がある場合コンピューター端末上で閲覧できるようにしています。同時にアクセスできる人数に制限がありますが、過度な占有が起らないように20分以上操作がないと自動的に電子書籍が返却される仕組みになっています。閲覧室内では基本的に著作権法の範囲内で自身のカメラや備え付けのスクリーンを利用して電子的なファイルを作成して複写することができますし、紙面に印刷して持ち帰ることも出来ます。

科学博物館の附属図書館

ロンドンの南西部、博物館などが集まるサウスケンジントン地区の科学博物館 (Science Museum) 附属図書館に参りました。小規模ではありますが科学博物館が所蔵している展示物に關係する資料を中心に自然科学系の資料が充実しています。

博物館内の図書館は博物館所蔵品の目録の規則と蔵書の目録規則をリンクさせる活動をしている最前線の領域です。図書館の所蔵目録と博物



イギリスといえばフィッシュ&チップス。チキンやハンバーグのメニューにはヴィーガン用の代替メニューが用意されていることが多いです。



Science Museum

「科学技術を展示する」の授業では半分ほどの時間を科学博物館や自然史博物館で過ごします。こちらは美術作品を科学博物館の展示物としてどう扱うかという回の風景。



(右) 大学に設置された給水機。ボトルを持参することが推奨されています。上部には累計で削減できたボトルの本数が表示されます。

(左) サステイナブルは博物館の展示テーマとしても意識されます。これは自然史博物館の展示で「私たちの壊れてしまった星」。

館の収蔵品目録、そしてアーカイブスの目録は従来その目的の違いから、別々の採録ルールに則って運用されてきました。現在、その違いを超えて目録同士がつながることで情報探索がより有意義なものになると期待され、様々な取り組みがなされています。

この科学博物館ではUCLとの協力のもと、私も履修している「科学技術を展示する」(Curating Science & Technology)という授業が開催され、博物館とほかの社会教育施設における情報伝達方法の違いを实地で学ぶことができます。博物館の展示物がどのように収集されているのか、インターネットの発達により利用者との関係がどう変わったのか、展示物のデジタル化がどのような意味を持つのかなどを学習しました。

この授業では実際の科学博物館の展示物を取り上げて、グループで発表する課題があります。附属図書館は博物館収蔵品のアーカイブ資料も管理していますので、その収蔵品を収集するまでの経緯や現在とは異なる展示解説の内容、海外での巡回展に関するメールやFAQのやりとりなど博物館を利用者として見ているだけでは得られない情報に触れることができました。

ロンドンの生活

ロンドンには北緯51度に位置し、日本図では北海道よりも北、樺太あたりには位置します。暖流の北大西洋海流により高緯度にもかかわらず温暖で冬の間もめったに雪は降りません。一年をとおして安定して風が強く、常に雲が動いていくのが見えます。

サステイナブルな生活は一つの流行と言っているでしょう。大学のなかには手持ちのボトルに水を入れるための設備が数多く設置されています。このような設備は公共や民間など設置者を問わず様々な場所に置かれています。パブのメニューにも提供するまでに要したCO2の排出量が表示されている場合があり、日常生活の端々で自分たちの環境負荷を意識させられるようになっていきます。

ヴィーガンやベジタリアンの流行もこれと軌を一にするものです。イギリスでは日本と比較して食肉生産過程の環境負荷について強く意識されています。ほとんどのお店でヴィーガンメニューがありますし、スーパーマーケットでは代替肉のコーナーが存在し商品も豊富です。私もいろいろと試してみましたが美

(右) ロンドン市街地を一望できるプリムローズ・ヒル。日本であまり見かけない鳥としてはカササギがいます (マグパイと呼ばれます)。

(下) 街中の水辺ではカモメやクート、カモ、アヒル、さらにはハクチョウまで見かけます。



(上) ロンドンの街中で野良ネコを見かけることはまったくありません。その代わりにキツネに遭遇します。

(左) テムズ川にかかるタワーブリッジ。

味しいものが多いです。

その一方で建物の冷暖房に消費されるエネルギーへの意識は低いといえます。古い建物が多く、空気の密閉度合いが低いにもかかわらず、真冬でも室内では半そでの服装で過ごせるほどの温度に保ちます。ゴミの分別もリサイクルできるものとそれ以外とかなり大雑把であり、ひとくちにサステイナブルと言っても意識する対象が日本と大きく異なることを興味深く思います。

同じ都市部であってもロンドンと東京で見かける動植物の種類が大きく違うことも驚きの一つです。ロンドンは内陸に位置しますが、テムズ川の水運とともに発展した都市です。今でも街中に運河や水辺が多く存在し、水鳥を見かける機会が多いのが特徴です。

都心部にも自然を多く確保しようというのがイギリス流で、多くの公園が都心部にあります。公園や個人の庭などの所有者を問わず、手入れされていることも多いです。

COVID-19の感染拡大はロンドンで学ぶ学生に大きな影響を与えました。授業は基本的に現地の対面で開

講されましたが、教員が感染して急遽オンライン開講に変わったり、入国が大幅に遅れる学生もいたりしました。イギリスの人はマスクが嫌いなようで、1月27日に制限が緩和されるやいなや街中でマスクを外した人を何人も見かけました。マスクをしていると子音の連続する英語の発音が著しく難しくなるのと、口元で表情を伝えられないのが要因かと想像します。

この文章を執筆している3月現在では「公共交通機関内ではマスクをしてください」という慣れ親しんだ放送も聞かれなくなり、本格的な日常への帰帰を感じます。私のような外国から来た人にもワクチンを積極的に接種させることで、社会全体でのリスクを下げようとしているように見えます。そうは言っても感染者数はけた違いに多く、延べ人数で国民の3分の1が既に感染しています。社会活動を制限して感染者数を抑える日本と社会活動は制限せず感染者数の増加を許容する英国、その両方の文化に触れたことはこの時期に海外生活をする一つの学びだったかもしれません。

国立国会図書館には、国内外の図書や雑誌新聞はもちろんのこと、児童書、博士論文など膨大な蔵書があります。その中に地図があることをご存じでしょうか？ さらに問題です。当館の地図室は、どこにあるでしょうか？ 正解は、東京本館4階、東側です。入った正面と左手側は窓。四季折々の木々や空が見える、明るく開放感のある部屋です。

この地図室で私は現在、地図整理係の一員として、時に事務室で地図の整理、時にカウンターで利用者サービス業務に携わっています。地図の整理？ それは地図の目録を作ること。NDLオンライン等での検索時に、地図現物の分身となつてその情報を示す、書誌データを作ることです。

えてして、地図の命は短いものです。あつたはずの建物が無くなることも、新たな道が通ることもあります。古い地図を使い、現在の一点を指すのは困難かつ危険なことです。さらに、現代はインターネットサービスの充実で、最新の地理情報の入手が容易になりました。

では、古い地図には一体何の価値が？ それは、その土地の歴史、人の営みを刻み、雄弁に語るものであるということが挙げられます。こうした地

図を永遠のものとするためには、いくつか要件があります。適切な保管は、大前提。そして重要なのが、アクセスの保証。つまり整理、書誌データの作成と管理なのです。

当係が整理を行う地図は多岐にわたります。国内で日々刊行される各種地図に加え、外国発行の地図、戦前に刊行された地図などの整理を5名の職員で担当しています。そのため書誌データ作成時にも、どうすれば検索で見つけてもらいやすいか、時に言語の壁等に悩みながら工夫を凝らしています。それゆえ、カウンターに立っている時、自分が整理を担当した地図が利用されているのを目にすると、お役に立てたようで嬉しくなります。

紙媒体で刊行される地図は、世界的にも減少傾向にあると言われます。しかし地図が更新が容易であるがゆえに流動的な、データ主体の存在になるからこそ、ある一時点を刻んだ紙地図とその書誌データは、より重要性を増すと思われる。100年先でも、土地の歴史が詰まった地図を、かつての人の営みを見つけてもらえますように。途方もない未来を見つめ、今日も地図整理係は、目の前の地図一枚一枚に向き合います。

(人文課 地図整理係 地図見習い)

地図よ、人の営みよ、
永遠なれ



本屋に

ない

本



日本酒類販売 70 年史

1949-2019

日本酒類販売株式会社管理本部 編
日本酒類販売 2019.9 663p ; 27cm
<請求記号 DH22-M328>

1970年代後半の第一次焼酎ブームを牽引した薩摩酒造株式会社（鹿児島）の『さつま白波』や1980年代に躍進した三和酒類株式会社（大分）の『いちこ』といった本格焼酎、あるいはスコッチウイスキー『ベル』等は、広告等を通じて愛飲家以外の方々の耳目にも馴染み深いではなからうか。これら酒類を取り次いでいるのが、大手酒卸・食品卸の日本酒類販売株式会社である。酒類配給公団が廃止され、酒販で長く続いた統制経済が自由経済に転じた昭和24（1949）年に、同社は設立された。本書は、同社の令和元（2019）年までの70年間を綴った社史である。

本書は、年度（期）ごとに社内外の動向を記載し、本編に位置づけられる「沿革編」と、「写真年表」（冒頭）・「付録」（巻末で詳細な年表等を含む）を内容としており、社史としてはオーソドックスな構成をとっている。しかし、こと酒類、食品類など、取り扱っているものが生活にも身近なものであるだけに、具体的な和洋酒についてのエピソードや歴史が酒類販売の歴史の流れと絡めて紹介されていることは興味深い。

例えば、同社の手印清酒（独自ブランドの一手販売商品）にあたる『八重寿』は、昭和26（1951）年3月に秋田県下の酒造場の多くから賛同を得て販売を開始したものである。この『八重寿』ブランドは、平成8（1996）年に発売された特別純米酒『白神山地の四季』等に代表され、現在に至るまでの流れを本書でうかがうことができ。また、『さつま白波』や『いちこ』等売り出す際の販売促進策など、ビジネス面での工夫や努力も簡潔にまとめられている。こうした、「酒卸」の立場から個別の酒の動きを眺めるといふ独特の視点が貫かれていることが単なる酒に関する読み物におさまりきらない本書の魅力である。

酒類業界の歴史に関心を持つ読者にとっても、本書は有用なものとなっている。沿革編は、50周年を境とした二部構成（1949～1999、1999～2019）となっているが、50周年前年の平成10（1998）年における酒類販売業免許取得要件についての規制緩和は、酒販において画期となる出来事であった。第二部では、この規制緩和への対応のために同社が行った物流や情報系、事務部門等への様々な社内改革について紙幅を割いている。また、酒問屋や酒類配給機構の歴史を描いた第一部冒頭の「設立前史」も一読の価値があるだろう。

沿革編に散りばめられたコラムも、酒類関連の豆知識から同社野球部の活動まで、幅広い関心をそそる印象深い内容となっている。

（諸橋邦彦）

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介いたします。

国際子ども図書館展示会 「子どもを健やかに育てる本—令和2年度児童福祉文化財推薦作品」

国際子ども図書館では、展示会「子どもを健やかに育てる本—令和2年度児童福祉文化財推薦作品」を厚生労働省との共催で開催します。

児童福祉文化財は、子どもたちの健やかな育ちに役立ててもらえるように、絵本や児童書等の出版物、演劇やミュージカルの舞台芸術、映画等の映像・メディア等の作品について、厚生労働省社会保障審議会が推薦を行っているものです。

この展示会では、同審議会が令和2年4月から令和3年3月までの期間に推薦した児童福祉文化財のうち、絵本や児童書31作品を直接手にとってご覧いただくことができます。

入場は無料です。ご来場をお待ちしております。

- 開催期間 8月2日(火)～8月28日(日)
- ※月曜日、8月11日(木・祝)及び8月17日(水)は休館
- ※開催予定が変更になる場合があります。最新情報については、国際子ども図書館ホームページなどでご確認ください。
- 開催時間 9時30分～17時
- 会場 国際子ども図書館レンガ棟3階ホール
- 問合せ先
国際子ども図書館資料情報課 展示係
電話 03(3827)2053(代表)

令和4年度資料保存研修

国内の各種図書館員等を対象に、資料保存に関する基礎的な知識と技術の習得を目的として、資料保存研修を実施します。

- 会場・日時
東京本館 新館3階研修室 9月8日(木)、9日(金)
各日9時30分～16時30分(各日とも同じ内容です。)
- 対象 国内の公共図書館、大学図書館、専門図書館等に勤務する方
- 内容 講義：①図書館資料の保存
実習：①簡易補修②無線綴じ本を直す
③外れた表紙を繋ぐ
- 持ちもの えんぴつ、エプロン
- 定員 24名(各日12名)
- 1機関からのお申込みは1名までとし、申込多数の場合は調整させていただきます。
- 申込期間 7月5日(火)10時～22日(金)17時



展示会「子どもを健やかに育てる本—令和2年度児童福祉文化財推薦作品」ポスター

○申込方法 当館ホームページをご覧ください、参加申込みページからお申し込みください。

ホームV資料の保存V保存協力Vおもな研修会や講演会のテーマ・記録等V令和4年度資料保存研修
<https://www.ndl.go.jp/preservation/cooperation/training/4.html>

※右記の申込みページは7月5日(火)に公開予定

○問合せ先 収集書誌部資料保存課
電話 03(3506)5219(直通)
電子メール hozonka@ndl.go.jp



令和元年度資料保存研修の様子

新刊案内

レファレンス 857号

批判的人種理論をめぐる論争とアメリカの学校の人種問題

ドイツ基本法上の議院内閣制における信任—信任手続を中心に—

イギリス議会における委任立法統制
米英独仏の予備費制度（資料）



A4 80頁 月刊 1,100円（税込）
発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 352号

デジタルアーカイブの教育活用をめぐる可能性と課題—実践を例に—

学術界とソーシャルメディア—Twitter活用の功罪と希望—

私立大学等改革総合支援事業に対する大学図書館の関与可能性

^ 動画レビュー ^

公共図書館によるYouTubeを用いた動画の公開
デジタルアーカイブにおけるクラウドソーシング

・海外の事例から
欧米の図書館における精神障害者向けサービス



A4 28頁 季刊 440円（税込）
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ
日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03(3523)0812



#30 国際子ども図書館
アーチ棟屋上にて
photo by Kenzi

展示会

子どもを 健やかに育てる本

—令和2年度 児童福祉文化財推薦作品

厚生労働省 社会保障審議会推薦 児童福祉文化財

令和3年度 (令和2年度 児童福祉文化財推薦作品)

子どもたちに 読んでほしい本

厚生労働省では、子どもたちの健やかな育ちに役立ててほしいため、絵本や児童図書等の出版物、演劇やミュージカルの舞台芸術、映画等の映像・メディア等の作品について推薦を行っています。こちらにある絵本や児童図書は、令和2年4月～令和3年3月の期間に推薦された31作品です。

これまでの推薦作品、舞台芸術や映像・メディア等の推薦作品はこちらへ

厚生労働省ホームページ <https://www.mhlw.go.jp> 児童福祉文化財とは 検索

厚生労働省
Ministry of Health, Labour and Welfare

入場
無料

令和4年8月2日(火)～28日(日)

時間 午前9時30分～午後5時

会場 国際子ども図書館
レンガ棟3階 ホール

休館日 月曜日、8月11日(木・祝)、17日(水)



International Library of Children's Literature
国立国会図書館 国際子ども図書館

7/8

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2022.7/8

NO.735/736

JULY/AUGUST
2022

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
From *Gendai honpo chikujoshi* (part 2, vol.1) :
Offshore fortresses built in Tokyo Bay
- 06 57th Committee on Designation of Rare Books
Materials recently designated as rare books
- 18 NDL Image Bank
- 20 Travel writing on world libraries
Libraries in London
- 26 <Tidbits of information on NDL>
Maps, eternal trajectories of humankind's activities
- 27 <Books not commercially available>
Nihon shurui hanbai 70nenshi: 1949-2019
- 28 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和4年7/8月号 (No.735/736)

令和4年7月1日発行

発行所 国立国会図書館
編集者 松浦 茂
責任者

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<https://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



NATIONAL
D I E T
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2022.7/8

 国立国会図書館
National Diet Library, Japan

図

玉

玉

冊

人

六